

六三園逸聞

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1445

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



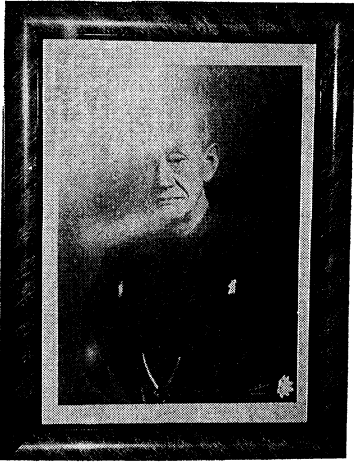
六三園逸聞

松 村 茂 樹

はじめに

六三園は明治四十（一九〇七）年、日本人実業家・白石六三郎（一八六八—一九三四）が上海郊外の江湾路に設けた純日本式庭園を有する日本料亭である。正式には六三花園といい、白石が上海日本租界文路に開いていた料亭・六三亭の支店という形をとっていたが、六千坪の広大な敷地を誇り、在留邦人に無料で開放されていたことから、料亭を設けする公園と言ってもいいと思う。

そんな六三園には、当時の上海在留邦人のみならず、日本からの渡航者も多く訪れ、伏見宮、西園寺公望など皇族、政財界人をはじめとする著名人も少なからずこの客となった。また、六三園の客は日本人ばかりではなく、上海在住の中国要人および文化人の中にも好んで六三園に通った者がいた。当時の上海書画壇領袖・吳昌碩もその一人である。吳昌碩は手厚くもてなしてくれる主人の白石を友とし、数多くの詩や書画を贈っている。



白石家に掲げられている白石六三郎の遺影。

筆者は吳昌碩を研究する立場から、白石との關係に注目し、「吳昌碩と白石六三郎——近代日中文化交流の一側面——」(『大妻女子大学紀要—文系—』第二十九号・一九九七・大妻女子大学 所収)を執筆したが、この執筆が可能となったのは、白石六三郎の孫・白石明氏(故人)夫人・白石喜代子女史および明氏長男・白石直明氏、更には白石六三郎と深いつながりを有する長崎の卓袱料亭・富貴楼の内田操治女史より、貴重な証言と資料の提供をいただけたからである。ただ、この時には、吳昌碩と白石六三郎の関わりという点にしぼって論じたため、興味深いにもかかわらず、採用できなかった証言や資料が若干残された。つまり吳昌碩との関わり以外の六三園や白石六三郎にまつわる逸聞の類である。これらをむざむざお蔵入りにするのはあまりにも勿体ない。なぜなら六三園と白石六三郎については、その存在が重要視されながら、今や事跡がほとんどわからなくなっているからである(たとえば近藤高史「吳昌碩と日本人」△『書道研究』通巻四十四号・一九九一・萱原書房 所収)は、「どんな人物か、経歴のほどは不明である」と言い切っている)。よって本編では前に紹介した各位の証言や提供資料を主とし、その他関連資料をおりまぜて、六三園と白石六三郎にまつわる逸聞の類をまとめておきたい。このことにより、近代上海と日本人を語る上で欠くことのできない人物に光をあてる手助けができるはずである。

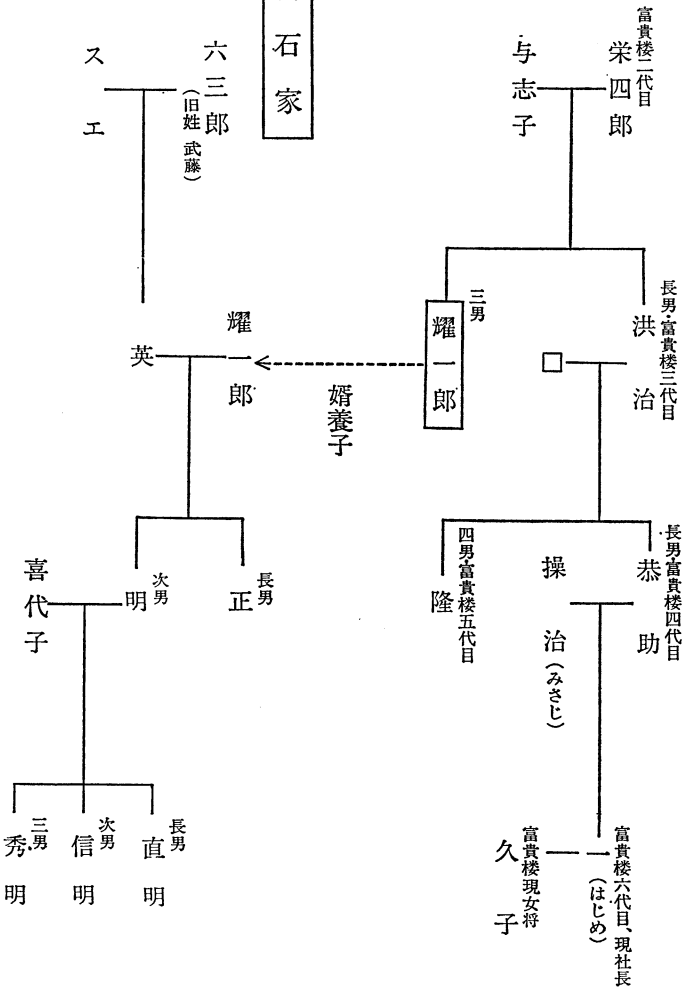
白石六三郎の家族と子孫

白石六三郎は長崎の人で、旧姓を武藤むとうといった。白石は妻の姓である。妻の白石スエは長崎県南高来郡みなたなまの出身。二人の間には一人娘の英ひでがあり、長崎の富貴楼二代目・内田栄四郎うちだ えいしろうの三男・耀一郎よしみちろうを婿養子として迎え、六三園を継いだ。ちなみに六三郎は早くに金太郎きんたろうという養子を取っており、後に金六亭きんろくていという料亭をまかせた。また、妻・スエの弟で杉原家に養子に行った杉原政之助すぎはら まさのすけには六三亭の支店・新六三しんろくさんをまかせている。

前出白石喜代子女史、白石直明氏の証言および富貴楼のパンフレットにより略系図を作成し、掲げさせていただく。

内田家

白石家



重光公使救助

昭和七（一九三二）年四月二十九日の天長節（天皇誕生日）、六三園のすぐ東側にある新公園（虹口公園）で、上海居留民団主催の祝賀式が行われ、当時の駐華公使・重光葵と軍関係者三名が来賓として壇上に並んでいた。式はとどこおりなく進み、最後の君が代斉唱の時、朝鮮共産党員・尹奉吉が投げた金属爆弾が炸裂、重光公使は重傷を負った（後に右脚切断）。この時、式に参加していた白石六三郎はまづ先に重光に駆けよって六三園に運び、更に福民病院へ運んだという。重光は六三園の常客であつたらしく、白石家には重光の写真も残されている。

常客の俳優

白石六三郎は厳格な人物で、六三園の帳場に座っているだけで、周りの者はピリピリするほどであつたという。だがその反面、人情深く、在留邦人の娯楽に供するべく六三園を開放し、各種行事を催したりした。また、日本から力士や俳優が来ると、必ず六三園に招待したらしい。これは娘の英の代になつてもひきつづき行われ、白石喜代子女史の知る限りでも、上原謙、山田五十鈴、長谷川一夫、李香蘭（山口淑子）などがよくやって来ていたという。

所蔵書画の行方

白石六三郎は風雅に通じ、鹿叟と号して中国の文化人達と積極的に交わつた。また、書画の収蔵にも富んでおり、賓客に披露することも多かったらしい。たとえば池田桃川『続上海百話』（一九二二・日本堂）には、西園寺公望が六三園を訪れた際、六三郎は自蔵の沈石田（明の書画家）の書を見せたことが記されている。

白石六三郎旧蔵の書画は、娘の英に受け継がれていたが、日本の敗戦により上海から引きあげる際、笹川良一に預けら

吳昌碩が一九一五年、白石鹿叟（六三郎）のために清の八大山人の鹿図を臨して贈った画幅。李瑞清（清道人）、鄭孝胥の題款がある（劉海棠、王介籛等編著『回憶吳昌碩』・一九八六・上海人民美術出版社 所収）。



れたという。だがその後どうなったのか、白石家の方でもわからないらしい。

日本情緒満喫

白石六三郎と中国文化人との交誼について、鄭逸梅「覚園和六三園」（上海市文史館、上海市人民政府參事室文史資料工作委員會編『歷史文化名城——上海——上海地方史資料』・一九八八・上海社會科學院出版社 所収）は次のような証言をしてくれている。

ある時、（白石六三郎は）曾農^{そうのらぜん}、錢瘦鉄^{せんちゆうてつ}、王西神^{おうせいじん}、劉亜文^{りゅうあぶん}、楊樹莊^{やうじゆうせう}、汪英賓^{わうえいひん}、徐秋生^{じょしゅうせい}を招いて宴飲した。王西神は

『鹿園歌舞記』(鹿園は六三園の別称)を撰し、その勝景を略述して、「小山の麓には流泉がめぐっており、チントンと琴や三味線の音がする。谷川のせせらぎは細かく砕けた玉が触れ鳴るかのようで、静かに悟りの心を誘い、池の中には白石が舗かれ、透き通っていて底まで見える」と述べている。その日の歌舞もまた一時の盛を極めた。王西神の文はまた、「主人は広場の上に席を設けた。芳しい草は茵をのべひろげたかのようで、散る花は髪にふりかかり、特製の西洋菓子とはとてもよくできている。多くの歌妓が杯を持って来て酒をすすめてくれ、酒が三たび飲み干されると歌舞が始まる。歌う者は十一人で、六人が椅子に坐り、五人がその下に正座して坐る。椅子に坐る者は弦楽器を弾き、正座する者は鼓を打つ。左右の両端は、一人が太鼓をたたき、一人が玉笛を吹く。緩急のつけ方は音律にならっており、全員が拍子をとって歌う。歌声がおこるや、舞妓二人が場中に飛び入り、腰を地面にくっつけるようにして反らせ、しなやかに舞いおどる。軽やかなること風が翔け、輝やかしきこと霞がたちのぼるかのようで、観る者は皆ふわふわと雲を越えて行くかのような気持ちになったものだ」と述べている。

中国の文化人達が白石六三郎によって六三園に招かれ、日本情緒を満喫していたことが窺える。

同時代人による記述

当時の日本人が六三園について記したものをアトランダムにあげておこう。まず山崎九市『上海一覽』(一九二四・至誠堂新聞舗)に次のような一節がある。

上海に於て料理を売る日本人商家の数は会席料理を始め仕出し屋、鋤焼屋、鮎屋、麵類屋、洋食屋、カフェー等を合せると彼は百軒に上る。……(中略)……扱て料理屋の美味さうな所を紹介しよう。

芸妓を置いて居る店。

六三亭 文路二四六号

六三園 江湾路、六三亭の附属

(後略)

六三亭と六三園が筆頭にあげられている。

日本からの旅行者の記述として近藤達児『新支那旅行記』(一九二九・田口書店)を見ておこう。

(昭和四年六月六日)午後三時六三花園に三井銀行支店長土屋氏の肝煎に成る硯石陳列会に赴いた、在留邦人や二三支那人の教寄者が銘々自慢の硯石を持寄られて五六十面もあつた、中には随分珍しい品もあるとの事で秘蔵者はお互に天狗話に時を移した、陳列会が終つて晚餐が出た酒席は上海の日本美人が取持つて面白く一行の旅情を慰めてくれた。日本芸妓は上海に二百人程あるとの事であつた。

六三花園といふは日本人の経営する処で庭園広く純日本式であつて木石の配置池水の塩梅異郷に在つては珍らしい結構であつて新月花園に比べると一段上である、丈余の石灯籠間余の据石皆長崎より持ち来れるものであるといふ。

旅行者・近藤達児の印象深さが伝わって来るようだ。

最後に杉江房造、江南健児共著『新上海』(一九三二改版・日本堂)から抜粋しておこう。

六三亭の支店、六三花園は上海唯一の日本式建物座敷を構へたる庭園にして、泉石の清雅なる、四時百花の絶えざる、種々禽鳥の和鳴せる、且つ宛がら青氈を敷詰めたるが如き芝生の運動場を有せる等、公園にも相応しき設備と面積とを有せり、而も園は一般に公開せるが為め、その清興雅趣を掬せんとて春夏秋冬衣香帽影の絶間なし曾て北白川宮殿下が御渡欧の途次、立寄られて昼餐を取られたることあり、又欧州大戦後仏国に於ける講和会議開催の際には、我講和特使西園寺老公が往路休泊され上海有名の文人墨客を此処に会して虎節の意気を養はれたることあり、『興亦不淺』の三大字を書して園主に贈られたる世界的活歴史の一齣は、今尚ほ園の大広間に掲げある扁額が物語りて興味長へに津々たるを覚ゆ。

「上海料理業組合」一覽表（『今日の上海』所収）

業 組 合				上 海 料 理			
初月 神戶 福太郎	美濃 桑 豊田 定	東京 福井 芳之助	あづま 佐々木 豊三郎	戸 野 叶 仙吉	若松 増見 喜四郎	中 誠 余 詩 陶	濱 吉 木 村 浩之助
梅林 森 昌	六三園 白石 六三郎	新 橋 木 原 茂 太郎	五 輪 鶴 殿 治 三郎	八 木 深 井 乙 松	松 酒 谷 泰	月 尾 家 島 田	津 島 重 太郎

園の隣りには、上海に於て古き歴史を有する金比羅神社、恵比寿神社と長崎の鎮守諏訪神社の霊体とを合祀し、滬上神社と名付けて上海の護神となし、毎年十一月三日には大祭あり。かなり詳しい紹介である。

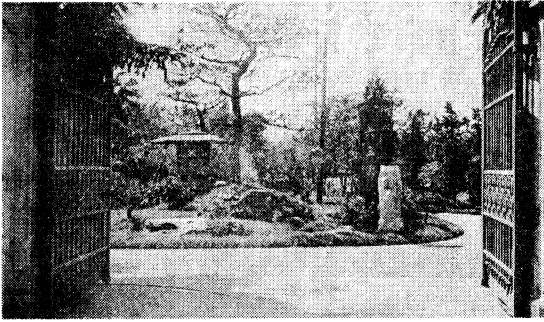
上海発音でイロハ順

『今日の上海』（刊行年不明・上海料理業組合）という小冊子に当時の「上海料理業組合」一覽表が掲げられている。白石六三郎は常にこの組合の中心的存在であったという。さて、この一覽表はイロハ順となっているのであるが、おもしろいことに、漢字の店名は日本の音読みではなく、上海語の発音によってルビがふられ、イロハ順に並べられている。たとえば「六三亭」は「ロセーリン」、「六三園」は「ロセーユー」という具合である。

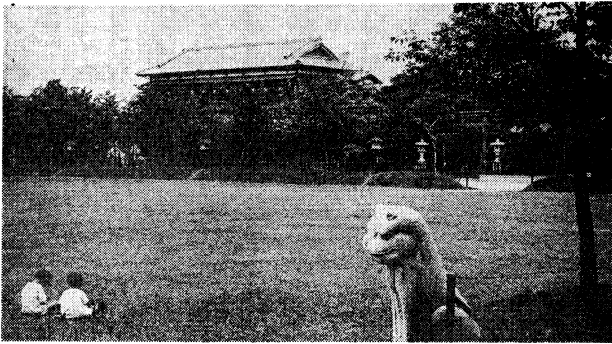
ちなみに、「六三園」は「六三亭」の、「梅林」は「松廼家」の、「月廼家花園」は「月廼家」の附属料亭であるため、後にまとめられている。「六三園」と「梅林」は郊外に、「月廼家花園」は市街中にあり、共に広大な庭園を有していた。

写真集中の孫

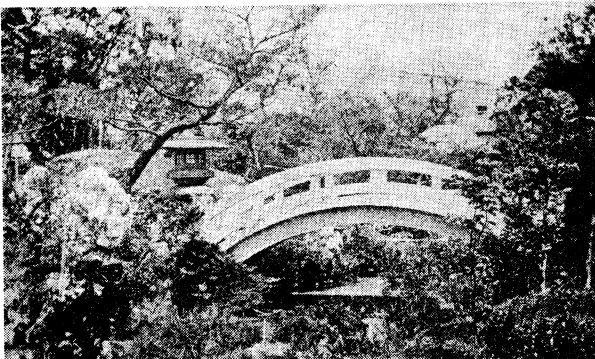
小堀倫太郎編著『写真集・懐かしの上海』（一九八四第一刷、一九九五新装版第一刷・国書刊行会）は、租界時代の上海の姿を窺うことのできる貴重な写真集であるが、この中に六三園を撮影した写真が三葉収められている（ここに転載させてい



六三園の正門。門石はもと日本総領事館で使われていたもの。長尾雨山による来歴の記が刻されていたという。



広場から松の間を望む。



六三園庭園の雪景色。
（共に『写真集・懐かしの上海』所収）



白石六三郎が孫の正、明と共に内田栄四郎、与志子夫妻に贈った「刺繡牡丹図匾額」(富貴楼蔵)。

ただいた)。このうちの一枚が広場から六三園の本館とも言うべき松の間を写したもののなのであるが、白石喜代子女史によると、この広場に坐っている二人の男の子は、白石六三郎の孫(英と耀一郎の長男と次男)で、左が兄の正、右が弟の明であるという。

ちなみに明の名は、当時上海総領事をつとめていた有吉明の名を白石六三郎がそのままらって命名したとのこと。有吉総領事も六三園の常客で、一九一九年、西園寺公望が上海に立ち寄った際も、六三園に案内してもてなしている。

富貴楼との絆きずな

長崎の富貴楼は前述の通り、白石六三郎の娘婿・耀一郎の実家であり、六三郎は富貴楼との関係を大切にしていた。現在も富貴楼の大広間に掲げられている牡丹を刺繡で描き出した匾額は、六三郎が孫の正、明と共に、富貴楼二代目・内田栄四郎・与志子夫妻に贈ったものである。

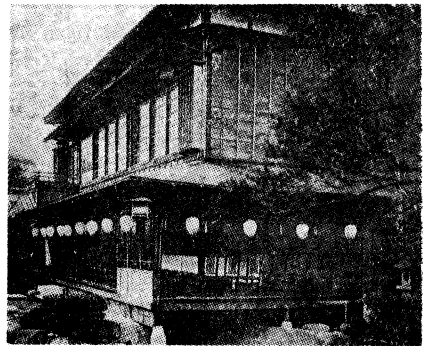
また、これは確証はないのであるが、今に伝わる六三園中の建物の写真を見ると、富貴楼の建築様式によく似ていることから、白石六三郎は六三園を開くにあたり、少なくとも建物に関しては富貴楼をモデルとしたのかもしれない。

大規模な葬列

六三園は一九三二年一月二十八日に勃発した上海事変の際、破壊されてしまった。当時六十三歳の白石六三郎はすぐさま再建に着手し、以前よりも荘大で堅固な建築群を現出させて行った。だがその完成を見ることなく、一九三四年四月二十六日、六三郎は六十六歳で逝去、その直後に六三園の再建が完了した。白石喜代子女史によると、完成を待つことなく世を去った六三郎のために、人々は棺をかついで六三園のあらゆる建物をめぐり、その後、葬列をくんで上海の街を練り歩いたという。その時の写真が白石家に残されているが、これを見ると、葬列の規模の大きさ、そして見送る人々の数の多さに驚ろかされる。



前頁匾額の題款部分



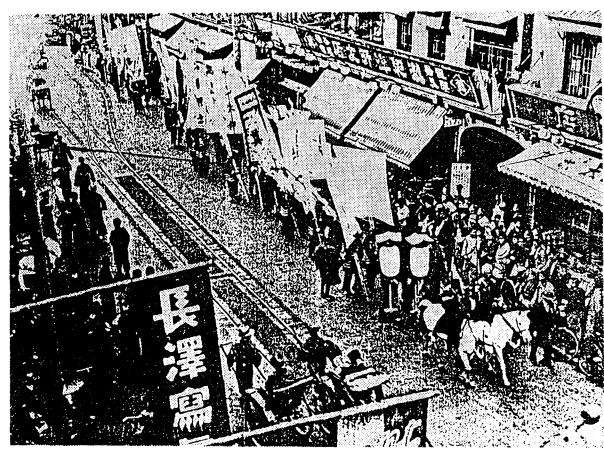
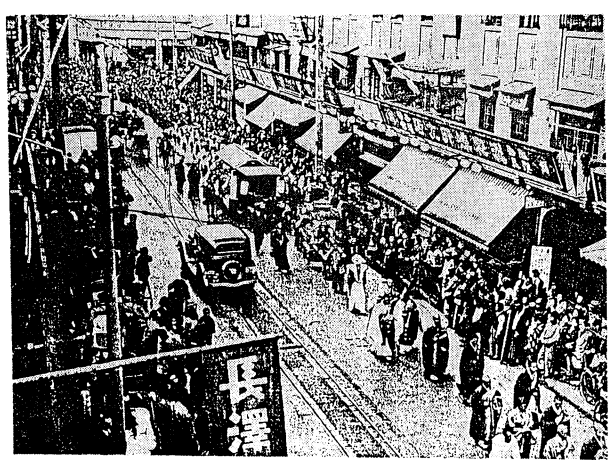
六三園初期の建築物（『書道グラフ』第38巻第4号・1993・近代書道研究所 所収）。



富貴楼の一角（富貴楼パンフレットより）。

前述の通り、本稿は白石家、内田家の御協力の下ではじめて執筆が可能となった。御両家各位に重ねて御礼申し上げる。また、本稿執筆のきっかけを作って下さると共に、資料捜検に御助力下さった長崎市在住の大崎熊雄氏に御礼を申し上げます、結びとしたい。

おわりに



上海市街を行く白石六三郎の葬列（白石喜代子女史蔵写真のコピー）。